

姪の結婚話

恒川 武敏

私の姪（弟の長女、二十三才、大卒）から夜の九時過ぎ突然電話がかかり、「相談したいことがありますから、明日京都に行きますのでよろしく」ということであつた。以前から承知していたことは彼女には交際している男性がいること、彼女と結婚したい意志を持っていること、彼女は自分の家の仕事を継ぎたくないことであつた。そこでまづ、両親の意向を知つておくため、翌朝電話で確認したことは、母親は彼との結婚に絶対反対、父親は本人が幸せになれると思われるならば結婚を許してもよいから私の意見を聞き度いとのことであつた。

翌日彼女は午後二時頃に着いたので、

勞をねぎらいながら、彼K君（二十六才、高商卒）との交際の状況、家族状況（Kは三兄弟の三男）K君の人柄、職業等を聞いた。彼女は何一つ躊躇することなく単々として話しをしてくれた。特にK君の人柄は実直、誠実ということであり、パン製造の技術者として某ホテルに就職して七年よく辛棒し、上司からも大切にされている。二人は真実愛し合つていたので、この秋には結婚し、できれば一軒持つて独立の店を出したい、ということであつた。

彼女とK君とが打合せてあつた通り、翌日午前十一時頃にK君が京都に出てきた。二人で私に結婚の同意を求めるよう懇請するので、K君に対し、結婚後の生活設計、一軒店を持つ計画（場所、規模、資金等）彼女の両親の同意、仲人等について尋ねたが全く答えが出なかつた。二人は愛情さえあれば、互に励まし合つて、明るい幸福な生活が送れるものと考えていた。そこで、真実の愛情が二人にあれば、K君の幸せは自分の技術を一人前に

早く上達することで、後三年位は修行を積み、自他共に腕に自信が持てた時、結婚の相手を見つけたことが真の幸福を得られるのではなからうか。また彼女は自分の家（農家兼木工業）を継ぐべき人であつて、彼女が駆落ちまでして、結婚したとしても、K君として幸にする自信があるか否か。

このようなことを話し合つている中に、K君は自分自身の将来何をしなければならぬかが明らかになり、当面は何をおいても腕をみがく以外に方法がないことを悟つた。

しかしながら彼女は同じ職場で知り合つた彼と約一年間交際し、自分の理想の人（誠実で偽のない生活）を求めてきたので一朝にしてK君に同意することはできなかつた。彼女の家庭は両親と子供達との対話が全くといつてよい程、行なわれなかつた。姉妹三人は二階に各自室を持ち、階下に両親が住んでいるので、三人とも勤めに出ている関係上二階の姉妹のみの対話しなかつた。

彼女は初恋の経験をしたので、K君と別れる心は起きなかった。その後彼女は一週間京都に止まったので、何故自分の家業を継がないかの理由を尋ねてみた。彼女は静かに過去を顧みつつ、小さい時から家を継ぐのだと口癖のようにいわれていたので、その反動として家を継がないぞと考えるようになった。家の仕事が好きではないと話しをしてくれた。

私は彼女に両親がどのようにして育ててきたかを静かに話した。まづ大学進学について両親は何等の反対もなく、心よく大学生活を送らせてくれた。四回生の時に西欧諸国の独り旅も許してくれた。他人の所で働くことも認めてくれた。このように長女としての我侷を全面的に許してくれたのは大人として取扱ってきた証拠である。長女が跡を継がなければ次女（保母）も外に出てゆくだろう、三女（洋裁見習）も二人の姉が自由に生活したので、何故末子が跡を継がねばならぬのかというであろう。こうなれば、この家は両親限りで分散しなければならぬ。

人として、愛情を求めたことは幸福であるが、一家分散したり、他人（養子）が代って経営した時、姉妹はどのようなことになるだろうか。愛と現実生活の中で、可能な道を求める以外に方法のないのを互に夜遅くまで話し合ひしたが、彼女は最後まで決心しかねて帰郷した。

（つねかわたけとし 社会学部教授）



随筆

まぼろしか

久下 陸

国鉄山陰線の車窓に野の煙のにおいが流れこむと、乗客はみないいあわせたように話しをやめて窓の外をながめ、しばしその匂いにひたるのである。

このとき、私の心は遠い昔の路線に走り込み、幼い日々の光景を追いかける。泥んこになって灯ともしごろまで野中を飛びまわり、そのあげく、わが家の暗い電灯の下で夕飯をかきこんだ日々のごとを。

ゴトン、ゴトンと揺れる車の響きの中で、忘れていた歌を口ずさんでいる。

里わのほかげも 森の色も

田中の小路を たどる人も

かわずのなくねも かねの音も